The Japan Society of Educational Sociology

総合選択制高校の社会学的分析

○耳塚　寛明（お茶の水女子大学）
○菊地　栄治（国立教育研究所）

1．　視点と方法

1.1 研究のねらい

高校教育改革推進会議は、先の中央教育審議会答申『新しい時代に対応する教育制度の改革について』をふまえて、総合学科の創設や単位認定方式の弾力化などの抜本的な改革案を打ち出した。その是非について賛否両論がたたかわされている。印象的に語ることはたやすいが、必要なのは改革の成否を思考実験によって推論することであり、予想される結果をできるだけ的確に読み取ることである。少なくとも政策として推進する前に地に足のついた研究がなされなければならない。この意味で、先導的な試みをいち早く手懸けた高校を取り上げ、改革の現実を冷静かつ客観的に捉え直すことは大きな意義をもっている。

とりわけ伊奈学園の試みは、わが国の高校教育システムのあり方をさぐる上で貴重な手がかりを与えてくれる。同校は、普通科の総合選択制高校のひとつとして最も豊富な選択科目を用意し、公立高校としては最大の規模を誇る。教科教室制やハウスは従来の学習指導と生活指導を調和させ、学系制は科目選択を進路の実態と教科の構造をふまえて合理的なものにする。単位制は、学年制によって硬直化しがちな履修システムを弾力化するものである。さまざまな面で伊奈学園の教育活動は最も大がかりな先導的〈実験〉なのである。わが国の高校教育は、量的拡充を達成して久しく、質的な向上へと目標を移行させてきている。戦後の理想的モデルとされたアメリカ的な理念は、比較的早い段階に挫折し日本的な形態へと変形された。いまでは、総合制や小学区制等を基本的な特徴とするアメリカのハイスクールは、日本的な分化した階層的構造にとって替わられることで復興すべきであるという議論さえみられる（B.R.クラーク*1）。アメリカの教育制度を無批判にユートピアとみなし、そこからの距離で教育の成功を評価した認識の仕方そのものを見なおすことが求められている。とはいえ、「優秀性」（academic excellence）の追求を至上命題と考え、日本を先進的なモデルだと考えるのは誤りである。というのは、こうした社会的価値の選択自体がきわめて政治的な選択の結果であり、利害関係とイデオロギーの所産だからである。しかも、教育の構造は、それぞれの社会の歴史的・文化的文脈の関数なのである。したがって、アメリカ的なモデルが日本に移入できるかどうかを単純に問うのではなく、わが国の先導的な試みの基本的な特徴を描きながら、改革の構造的な基盤を読み取っていくことが肝要である。「高校の階層構造が生徒の学習効率を高めているのか」という問題に限定するのではなく、「生徒たちの学校生活への構えに総合選択制高校というシステムがどのような影響を及ぼしているのか」「生徒たち自身は入学後の変化をどのようにとらえているのか」「生徒たちの進路形成にとって伊奈学園の試みはどのような意味をもっているのか」「さまざまな効果はただ単に『総合選択制』によってもたらされたと考えてよいのか」といった数々の問いをひとつひとつときほぐしていかなければならない。「日本的」総合制高校が成立する背景には、わが国に固有の問題状況と歴史的・文化的文脈が潜んでいるはずである。

本報告では、とくに伊奈学園が他の標準的（一般的）な高校に比べて、どのようなメリットをもっており一連の改革がどのような社会的含意を孕んでいるかを「擬似実験的」手法を利用しながら検証してみる。

1.2 調査の概要

まず、伊奈学園の〈教育効果〉を探るために、伊奈学園と同様の生徒集団を抱える３つの標準規模の県立高校（Ａ校・Ｂ校・Ｃ校と仮称：３校をまとめて「標準３校」と総称）を選定した。その上で、伊奈学園と標準３校の３年生合計 1,378名に対して、集合自記式質問紙調査を実施し（1992年10月下旬～11月上旬）、両群の比較分析を行なった。各校の基本的な特性は、下記の通りである。

〈サンプル構成〉

項目＼高校	伊奈学園	標準３校		
		Ａ校	Ｂ校	Ｃ校
創立年	１９８４	１９６９	１９７４	１９２８
生徒数	３３５５	１３９１	１３６０	１２０３
入試偏差値				
（男子）	６２	６７	６１	５６
（女子）	６２	６７	６０	５５

「入試偏差値」から判断して、伊奈学園は、標準３校に相当する学力分布の生徒集団をひとつの学校に収容しているといえる（分布はＢ校と酷似）。この点は、本調査で得られた「中学３年時成績の自己評価」（７段階評定）の分布にも裏付けられており、少なくとも入学時の学力水準という点からみると、両群はほぼ対等な条件を与えられていると考えてよく、入学後の「アウトプット」（教育成果）の学校差の一定の部分は伊奈学園と標準３校で展開された「スループット」（教育的処遇）の違いによってもたらされたと推測できる。ただし、４校の学力水準はおしなべて高く、Ｃ校でもかなりの生徒が「中レベル以上」と自己評価している点には留意しなければならない。

２．　総合選択制と生徒の学校生活

2.1 高校入学をめぐる効果

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

＜輪切り選抜からの脱却＞

都市部の中学生にとって、通学可能な高校はきわめて多数に上る。かれらは、何らかの基準で高校を選択しなければならない状況に直面することになる。高校を選ぶときの微妙な心理は、個々人の生き方や価値観の反映であると同時に、社会的・文化的な状況の鏡でもある。この調査で対象となった高校生たちは、どのような基準でそれぞれの高校を選んだのか。

さまざまな選択の基準をどの程度重視したかを学校別に集計すると、伊奈学園が標準３校とはきわめて鮮やかなコントラストを見せていることがわかる。標準３校間の違いよりもむしろ、伊奈学園と標準３校の違いの方がはるかに大きい。伊奈学園の場合、最も重視されているのは「学校の施設・設備」（77.4％）であり、「自分の成績（合格の可能性）」（69.9％）、「選択科目の豊富さ」（69.4％）、「学校の雰囲気、校風」（66.1％）、「学校の授業内容」（60.7％）もかなり重視されている。これに対して、標準３校では、「自分の成績（合格の可能性）」（84.8％）と「通学の便」（72.1％）を重視する割合がひときわ高い。伊奈学園と標準３校を比べてみると、標準３校の場合にはいわゆる〈輪切り選抜〉体制に組み込まれた学校選択を行なっているのに対して、伊奈学園の生徒は、まさに高校が売り物にしている「特色」を考慮に入れた選択を行なっている。とくに、大学のキャンパスを彷彿させる恵まれた施設・設備、明るい校風、科目選択の自由度の高さ…などを重視する学校選択の姿勢は、いわゆる「偏差値」にもとづく選抜とは、いささか趣を異にしている。「推薦入試」という選抜方法の帰結である可能性も考えられるが、いずれにせよ従来の認識枠組では捉えきれないパターンがみられる。また、伊奈学園の生徒は「部活動の状況」も比較的重視しているが、これは同校が「中学時の部活動の状況」を踏まえた推薦入試を行なっていることの反映である。逆に、伊奈学園の立地条件と学区制を反映して、「通学の便」という条件は比較的軽視されているようである。

＜少ない不本意入学者＞

偏差値にもとづく〈輪切り選抜〉の結果、当然のなりゆきとして人気のない高校に多くの不本意入学者が集まる。しかし、その一方で、高校選びがその学校の具体的な「魅力」にもとづいているとき、生徒が「不本意に」学校やコースを選ぶ可能性は小さくなる。Ａ校～Ｃ校と高校の選抜性（入試難易度）が高くなるにつれて、不本意入学者の割合は少なくなっているのである。こうした〈常識〉を敷衍すれば、伊奈学園はＢ校と同程度の不本意入学者を抱えるはずである。しかし、現実はそうではない。伊奈学園の生徒のおよそ３分の２が「はじめから現在の学校・コース（学系）を希望していた」（64.8％）と回答しており、「現在の学校の、別のコース（学系）を希望していた」（14.7％）者を加えると、じつに８割の生徒が学校そのものの選択が希望通りに叶えられたと考えている。これは、Ｂ校よりも23.6％多く、Ａ校さえも13.8％しのいでいる。また、標準３校の場合、「別の学校の、現在と同じコース（学系）を希望していた」という回答も３割強に及んでおり（32.1％）、「どの高校でもよかった」という没本意的（あるいは消極的）な選択を行なった生徒も、標準３校は伊奈学園の約２倍に達している（13.5％ vs 6.9％）。このように、伊奈学園の生徒は、高 校の具体的な魅力（たとえば、優れた学校施設・設備・選択科目の豊富さ・校風など）をイメージして学校を選んでおり、積極的な意図をもって入学してきていることがわかる。この特徴は、高校階層構造上に位置づけられがちな「新設校」にはあまりみられないものである。推薦入学制度と全県学区、そして学校独自の特色（自由選択科目の豊富さや恵まれた施設・設備など）がうまく作用することによって、伊奈学園は入学の当初から学校に対してポジティブな生徒を数多く引き寄せているのである。ただし、不本意なコース（学系）選択を行なった生徒が無視できない割合を占めていることは、１年次の７月におおよその学系選択を求めることの難しさを示唆しているといってよく、この点は創設時より懸念されてきた問題点である。

それでは、このような伊奈学園の特徴は、入学後どのように受け継がれ、どのような成果をもたらしているのだろうか。次にこの点に検討を加えてみる。

2.2 学校生活への構え

入学時の学力の点では相等しい両群であるが、高校選択の基準と不本意性の点で大きな差異が見いだされた。それでは、３年間の高校生活を経たあと、かれらの学校生活の構えには一体どのような違いが生じているのであろうか。次に、この点に検討を加えて、伊奈学園の取り組みの「到達点」を探ってみる。

＜積極的な構え＞

まず、学校生活への構え（９項目）について生徒に回答を求めたが、伊奈学園と標準３校との違いはきわめて明瞭である。「信頼できる友人が多い」および「先生のいうことに納得がいかないことがある」を除く７つの項目で有意な関連が認められた。とくに、「学校の施設・設備に満足している」、「この学校の生徒であることに誇りを感じる」、「ホームルームに親しみを感じる」、「学校に親しみを感じる」の各項目で伊奈学園の生徒にポジティブな反応が目立った。学校に対する帰属意識が強く満足度が高いこともさることながら、ホームルームへの親近感の強さが注目される。さまざまな学系の生徒から構成される「ハウス」という生活集団が、「教科教室制」の弊害を補って余りある効果を及ぼしているかのようである。じじつ、「いなほ祭」などの学校行事はハウスを軸に組織され相互に競い合うことで連帯感を生み出している。しかも、３年間変更のないクラス担任の「持ち上がり制」が採られ、教科ごとにバラバラになりがちな生徒を集団としてまとめあげる工夫がなされている。

さて、高校生活を送る中で、生徒たち自身は自らにどのような変化が生じたと考えているのだろうか。総合選択制高校の〈教育効果〉を生徒の主観的な評価というフィルタ

NII-Electronic Library Service

ーを通して捉え直してみよう。

12項目のうち6項目で統計的に有意な関連が確認されたが、最も顕著だったのは「幅広い教養が身についた」で約20%の開きがみられた（49.0%vs28.9%）。ついで、「自分のやりたいことがはっきりしてきた」、「学校が楽しいところだと思うようになった」といった項目で目立った差異が認められた。さらに、「興味・関心の幅が広がった」「知的好奇心が旺盛になった」「大学合格に必要な学力が身についた」といった点でも伊奈学園の生徒は肯定的な反応を示した。伊奈学園の試みは、幅広い教養を身につけつつ明確な進路意識を形成するだけでなく、従来の「抑圧的な」学校イメージを払拭する上でも積極的な役割を果たしている。少なくとも生徒たち自身はポジティブに評価しているのである。

＜「成果」の源泉＞

このような伊奈学園の成果は、どのようにしてもたらされたのか。単純に「総合選択制」というシステムがたちまちのうちに成果をもたらしたのだろうか。これを何の裏付けもなく肯定することはできない。漠然とした単一のシステムのせいにするよりも、さまざまな条件が複合的に作用した結果であると解釈する方がむしろ妥当である。まず、入学する生徒の質（学力以外の条件については本研究では除去できていない）がそもそも異なったのではという推論が可能である。すでにみたように、全県学区によって目的意識が明確な生徒を集めるということが当初から公言されている。しかも、普通科としてはきわめて異例の推薦入学制度が採用されている。伊奈学園の推薦枠は増加傾向にあり、対象地域も周辺学区から全学区に拡大されてきた経緯がある。伊奈学園で学ぶことに多くの意義を感じる生徒が推薦入学で集められれば、学校生活にもポジティブな生徒が集まることは当然の結果である。さらに、学系による違いに表れているように、芸術や家庭（生活科学）の生徒は学校生活にかなり積極的である。人文・理数などそこここにある学習内容に取り組む生徒よりも明るい学校生活が展開されており、そもそもユニークな教育内容を編成することで生徒の積極的な関与をとりつけている可能性も小さくない。しかし、それだけではない。というのも、同じ人文・理数学系の生徒であっても、入学方式によって学校生活への構えは驚くほど異なっているからである。たとえば、「学校に親しみを感じる」と答えた生徒の割合は、推薦入学者は一般入学者より24.3%も多いのである。したがって、どのような内容の学習を行なうかという「教育内容」が重要であることも事実であるが、それだけでなく「推薦入学制度」という〈例外措置〉によって、早期に「向学校的」生徒を引き寄せておくことがこれに劣らず重要であることがわかる。このような要因を見落としたまま、伊奈学園の成果を漠然と礼賛することは、誤った判断をもたらすものであり慎まなければならないのである。

さらに注目すべきは、B校の生徒の反応である。学校生活への満足度・誇りの面では、B校は伊奈学園に匹敵する数値を記録しているし、学校行事への熱心さという点では、B校は伊奈学園をしのいでいる。しかも、「学校が楽しいところだと思うようになった」という回答もB校が最高だった。データが示すように、B校では、教師・生徒関係がきわめてインフォーマルであり、権威主義的ではなく和やかな人間関係が築かれている。このように、「総合選択制」という〈容れ物〉も大変重要であるが、それだけでなく既存の学校の枠の中でも（生徒の特性などによっても異なるだろうが）、個々の教師・生徒関係などミクロ・レベルの要素が生徒の学校生活への構えを左右する可能性がある。

＜改革のパラドックス＞

とくに、学校生活への構えをめぐって伊奈学園がおさめた成果は大いに注目されてよい。しかし、それは「大規模総合選択制」という〈装置〉によって自動的にもたらされたものではない。ひとつの県が相当なエネルギーを費やして創設し、一種の宣伝効果が生まれ、中身を伴った教育活動が展開されありとあらゆる工夫が施された結果である。入学する生徒は、異例なまでに学校に対して（もともと）ポジティブなのである。高校に行くことに積極的な意味を見いだした生徒を推薦入学という選抜方式で多数集める。これらさまざまな要因が複合的に連動して、現在の成果が生まれていると考えるほうが妥当である。さらに、B校の事例は、従来の標準規模の学校であっても、教師・生徒関係など人間関係的な要素によって伊奈学園に匹敵する成果を収め得ることを示唆している。もしかしたら、伊奈学園とB校には受験圧力が比較的かかりにくい（あるいは受験科目が少なくて済む）「私立大学受験者層」が多く就学しているからなのかもしれない。いずれにせよ、伊奈学園の試みの成功のある部分は、入学前の効果（指導しやすい生徒を引き寄せた結果）によってもたらされた可能性は否定できない。ここに、大学区制のもとでの「特色ある高校づくり」のパラドックスがある。したがって、伊奈学園の成果がいわゆる〈困難校〉にとって意味のある先導的事例になることはほとんど期待できないのである。「うかうかしていると生徒に食いつかれ、足をすくわれ、日常的に身の危険さえ感じながら指導している困難校の指導と同じ緊張感や必死の思いが指導の中にあるのだろうか」*2 と創立時にある教頭が記している。教員のモラール向上を意図した言説であるが、〈困難校〉と自校とを厳密に差異化していることを示唆している。かつて、創設準備当時の長井五郎教育長は、「『伊奈で成功したあれを学べ、あれで行こう』というようになってほしいのであります」*3 と学園創設の意義を語っている。伊奈学園が教育と社会をめぐる将来的ビジョンに与える真のインパクトを的確に評価するには、いましばらくの時間が必要である。

3．　総合選択制と生徒の進路選択

3.1　視点

わが国の高校教育システムは学校格差(tracking)によって特質づけられ、多くの研究はこの制度的構造ゆえに生徒

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

集団の進路選択の機会と範囲が制約されることを指摘してきた。同時に学校格差構造は、①学校同士の競争的関係を生み、②卒業後の進路や学校生活の点で、目的の明確なコミュニティを形成し、③カリキュラムというフォーマルな面においても、student-subcultureなどのインフォーマルな面においても、教育目標の効率的な達成に寄与する環境を提供しやすいことが指摘されてきた。それはアメリカの高校教育改革のモデルとも見られている。*4

本節の主題は、総合選択制高校における生徒の進路選択の特徴と進路選択のメカニズムを探るところにある。ここでは、疑似実験的に、①伊奈学園と②標準３校を、それぞれ①総合制的(comprehensive)高校教育システムと②選抜的(selective)高校教育システムに見立てて、生徒の進路希望の比較分析を行なおう。

伊奈学園と標準３校を、それぞれ総合制的システムと選抜的システムと見なすことには、もとより限界がある。第一に、学区制の問題である。伊奈学園は小学区制ではなく、また標準３校もそれら３校で１つの学区を構成しているわけではない。より重要なのは、伊奈学園は生徒集団を無選抜で入学させているわけではなく、選抜試験を行ない、その結果、学区の中～上位層の生徒集団を受入れている。小学区制をとり、かつ能力や進路の多様な生徒を同一の学校に受入れるシステムを「総合制」であるとすれば、伊奈学園は厳密な意味での総合制とはいいがたい。

しかし、1.2で示したように、伊奈学園は標準３校に相当する学力分布の生徒集団をひとつの学校に収容していると見なすことができる。厳密な意味での総合制にはあてはまらないにせよ、ひとまず伊奈学園を総合制「的」高校教育システムと見なして分析することには一定の意義があるだろう。

この問題についてのわが国における先行研究として、総合選抜制度実施下における大学進学実績を検討した岩木*5や吉本*6がある。吉本は、高校の階層的地位が生徒の進路分化に独自の影響を与えるメカニズムとして、①特定の学校ランクに一定の学力的資質の生徒が集中することによる社会心理的な影響（学校の社会的風土・仲間集団・教育の期待効果・能力のラベリングなど）、②一定の家庭背景の生徒が集中することによる社会心理的な影響、③学校ランクに応じたカリキュラムの影響をあげ、それらの相乗的な効果によって、学校ランクに特徴的な一定の進路アスピレーションとそれに必要な学力が獲得されるとしている。この指摘も、総合制的システム（伊奈学園）との比較によって、はじめて明確になる仮説的指摘にすぎない。

3.2　現在の進路希望と、進路希望の変化過程

まず、高校３年秋の時点での進路希望と、高校入学時からの進路希望の変化を記述しておこう。伊奈学園では、四大７６％、短大１３％、専・各５％、就職その他５％、未定１％。標準３校ではこれに比べて四大志望がやや少なく（６８％）、短大と専・各志望者がやや多いが、差は顕著ではない。つまり今回のデータをみる限り、総合制的システムと選抜的システムでは全体としての進路希望には大きな差が見られない。高校入学以降の進路希望の変化も、ほぼ同様のパタンをとっている。

3.3　中学３年時の成績別にみた進路希望

しかし、全体としての進路希望に大きな差がないからといって、即総合制的システムと選抜的システムの間に差がないことを意味するわけではない。総合制的システムと選抜的システムが生徒の進路選択に与える影響は、中学校卒業時点で同一の成績を示していた生徒同士を比較することによって、もっとも明確になる。

中３時の成績別にみると、伊奈学園と標準３校の間には以下の差がある。

①｛中３時成績中・下位層｝四大志望者は、伊奈学園８０％に対して標準３校では５１％。標準３校ではその分短大、専・各、就職希望者が多い。中３時成績｛中の上位｝層でも同じ傾向がある。

②｛同・（上の下）位層｝四大志望者は、伊奈学園７６％に対して標準３校では８４％。中３時成績｛上位｝層でも同様の傾向を示す。

以上から第一に、伊奈学園では中３時の成績下位者に対するアスピレーションの冷却メカニズムが作動せず、四大志望者がなお高い比率で存在する。第二に、同時に中３時の成績上位層に対しても伊奈学園ではアスピレーションの加熱メカニズムが作動せず、標準３校に比べて四大志望者が少なくなっている。伊奈学園では、進路志望の分布が中３時の成績と強く相関しないことも特徴である。ここから、選抜的システムでは、アスピレーションを特定の方向に仕向けるメカニズムが強く作動するのに対して、総合制的システムではそれが弱いのではないかという推測が可能である。

以下、これらの知見を学校別に検討し（3.4）、さらに両システムの相違が生まれるメカニズムについて考察を加える（3.5）。（紙幅の都合で当日、レジュメとデータを提示する）

(1)Ｂ．Ｒ．クラーク（耳塚寛明抄訳）「高校と大学－どこがアメリカで狂っているのか」『ＩＤＥ　現代の高等教育』No.270～272、1986年。
(2)岩田　淳「『学習する側に立った教育』について」埼玉県立伊奈学園総合高等学校『伊奈学園の教育』第１集、1985年、８頁。
(3)長井五郎「伊奈学園の将来に期待するもの」埼玉県立伊奈学園総合高等学校『伊奈学園の教育』第２集、1986年、９頁。
(4)Ｂ．Ｒ．クラーク前掲書（注(1)）。
(5)岩木秀夫「総合選抜制度の教育効果」『教育社会学研究』３２集、1977年。
(6)吉本圭一「高校教育の階層構造と進路分化」『教育社会学研究』３９集、1984年。

NII-Electronic Library Service